関西北前船研究交流セミナー

第４回 泉佐野　報告書

プログラム

北前船がつなぐ 泉佐野 と にかほ（関西＆東北・新潟ブロックの交流）

日　　時 ： 2023 年 11 月 10 日（金） 13:30～17:00

場　　所 ： 泉佐野市街（日本遺産構成文化財地区、スターゲイトホテル関西エアポート）

プログラム ： ●船主集落をめぐる　デジタルスタンプラリー（午前中）

●基調講演①　和歌山大学名誉教授　上村雅洋氏

●基調講演②　弘前大学名誉教授　長谷川成一氏

●地元伝統芸能　「佐野踊り」 披露

●トークセッション　両ブロック代表による両地のつながり 過去とこれから

開催にあたり　泉佐野市長　千代松大耕

本日は「第4回関西北前船研究交流セミナー」に大勢の皆様方にご参加をいただき誠にありがとうございます。心から厚く御礼を申し上げます。また本日は、地元の方々だけではなく、全国各地の北前船の寄港地からもご参加をいただいており、地元泉佐野市を代表しまして、心からの歓迎を申し上げます。

泉佐野市につきましては、南海泉佐野駅の海側に古くから佐野町場と呼ばれた地区があり、北前船で栄えた船主集落でした。その中でも、本日ご講演をいただきます豪商「食野家」につきましては、廻船業や大名貸しで巨万の富を築き上げ、地元のもう一つの豪商「唐金家」とともに、江戸時代の全国の長者番付に載っておりました。諸国家業自慢の上位にランクされていたという程の豪商でした。当時の佐野町場には、食野家のいろは48蔵と言われた多くの蔵々が建ち並んでいたという時代がありました。

しかしながら、幕末になりますと廻船業が停滞し、また廃藩置県により、大名に貸付けていた莫大なお金が返済されなかったことで食野家は没落してしまいましたが、その邸宅跡については、当時の佐野村が買取り、現在は泉佐野市立第一小学校となっております。私の母校でもあり、今は石碑、また当時からの松の木、使われていた井戸の枠といったものが残っております。このようなストーリーが泉佐野市にはあり、本日お越しいただいているにかほ市の市川市長さんにもご推薦をいただき、2年前に北前船寄港地として日本遺産認定が叶ったところです。

このセミナーにつきましては、全国各地の北前船にご縁のある自治体の中でもとりわけ関西ブロックの自治体、また民間団体が中心となり開催されてきたセミナーであると伺っております。今回は、その中でも初めての試みとして、東北・新潟ブロックの方から先ほど申し上げた秋田県にかほ市さんにもご参加をいただいています。

にかほ市の平沢地区の齋藤家につきましては、先ほど申し上げた食野家の山形、秋田における拠点を担っていただいていたというご縁もあり、平成31年1月に「歴史的ご縁が結ぶ地域産業の活性化協力協定」を締結し、これまで様々な交流をさせていただきました。今回もこのような形で、遠路にかほ市から市川市長はじめとする方々にお越しいただき、誠に有難く思っています。これからも様々な機会を通じてにかほ市さんとのご縁は大切にして参りたいと考えています。

最後になりますが、今回のセミナーを通じて、より一層北前船のストーリーを活用した取り組みが盛んになりますこと、ご参加の各自治体の今後の更なる発展、そしてご参加の全ての皆様方の更なるご健勝ご多幸を心から祈念申し上げ、地元を代表しましての歓迎の挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

来賓ごあいさつ　文化庁参事官（文化拠点担当）磯野哲也 氏

本日は、「第4回関西北前船研究交流セミナー」にお招きいただきありがとうございます。

日本遺産につきましては、地域にあります有形無形の文化財をストーリーでまとめ、それを総合的に地域の方々が取り組むことで、その日本遺産を活性化させていく。それにより、地域が活性化し観光振興が図られるという取り組みです。

先週の土、日曜日に、八王子市において今年度の「日本遺産フェスティバル」を開催致しました。北前船寄港地の方々にもブースを出していただき、大変な賑わいでした。ありがとうございます。日本遺産の取り組みについては様々なストーリーがありますが、全国各都道府県に最低一つはあり、現在104のストーリーを認定しています。その中には、一つの地域、一つの市町村で行っているものもあれば、北前船寄港地のようにシリアル型といって複数の市町村が関わっているものもあります。

北前船寄港地の日本遺産は49市町の方々が関わっている取り組みです。このようにたくさんの方々が取り組まれているので、一体感を出して取り組みを進めることは大変難しいのではないかと思っていますが、ブロック制を敷かれており、本日のこのセミナーのように関西の方々が集まり、そこに他ブロックであるにかほ市長が参加されています。そういった広範囲の方々が一緒に交わることで、そのシナジー効果をより発揮すべく取り組まれていることを大変嬉しく思っています。

北前船寄港地の取り組みについては、先月、岡山県でフォーラムを開催されましたが、東京・有楽町の交通会館では「北前船のアンテナショップ」を開かれており、そこで北前船寄港地に関するえりすぐりの品々を販売いただいています。先ほど申し上げた104のストーリーの中で北前船寄港地に関しては、その活動は活発な方だと思っています。文化庁としても、この日本遺産の取り組みについては引き続き、しっかりとご支援をしていきたいと思っています。

本日のセミナーが実り大きいものになりますよう、心より祈念を申し上げ、挨拶に代えさせていただきます。

来賓ごあいさつ　秋田県にかほ市長　市川雄次 氏

秋田県にかほ市から参りました市川でございます。秋田県「にかほ市」といってもなかなかご存じないかと思いますが、山形県と秋田県の県境にあります。歴史的な説明については、後ほど私どもの教育委員会の齋藤一樹より詳しく説明いただけるものと思っております。大変ユニークな方ですので、面白く説明いただけるものと期待をしています。

先ず、私からご挨拶させていただきます。「第４回関西北前船研究交流セミナー」がこのように盛会裏に開催されましたことをお祝い申し上げます。そして、私からも「泉佐野市」と「にかほ市」のご縁について、少しお話をさせていただきます。両市の歴史的なご縁については、今回のテーマである北前船が大きな理由になります。にかほ市には四つの港がありますが、当時としてはいずれも大きな港であり、そのうちの一つ、平沢港を、千代松市長からもお話いただいた齋藤市兵衛という廻船問屋が仕切っていました。

この齋藤家は東北で一番歴史ある家で、現在も全国で3番目に古い造り酒屋「飛良泉本舗」を営んでいますが、この齋藤家が和泉の国・佐野浦、現在の泉佐野市の豪商であった「食野家」の出羽における支店的な役割も果たしていたのです。

泉佐野市とのこのような歴史的なご縁を新たに紡ごうということで、平成31年1月30日、「歴史的ご縁が結ぶにかほ市、泉佐野市地域産業の活性化協力協定」を締結させていただきました。泉佐野市とにかほ市はそれぞれの地域の商いを通じて協力、発展してきた歴史を踏まえ、いま、新たな縁を紡ぎなおす協定を締結し、それを出発点とし改めて地域産業の活性化に向け、お互いに協力しながら進めていこうとしています。

協定締結後の活動をご紹介しますと、一つに、特産品の相互販売を行っています。にかほ市の「道の駅　象潟ねむの丘」において泉佐野市の商品を取り扱い、泉佐野市でもご縁の元となった飛良泉の「酒」を販売していただいています。また、両市の市民のグループがそれぞれ相手市を相互訪問し、歴史や文化の交流を図っているところです。

しかし、こうした交流もコロナ禍で一旦中断をしていましたが、先月、にかほ市に泉佐野市の職員の方々が秋の観光イベントでお越しいただき、泉佐野市のPRと特産品販売を行っていただきました。そのブースへは多くのにかほ市民も立寄り、特に名物の「泉州水なす」はイベントの開始から30分ほどで完売したと聞いています。

このように改めて交流が再開されたことに、私どもも大変喜んでおり、今回、「関西北前船研究交流セミナー」がこの泉佐野市で開催されることから、私どももお招きいただきました。こうしたブロックの枠を超え、今後も一体となりながら交流を活発化させ、地域の発展へと繋がっていくことを心より祈念申し上げるところです。このセミナーが盛会裏に進められていくことを期待し、そして本日お集まりの皆様のご隆盛を祈念申し上げ、私からのご挨拶とさせていただきます。

プログラムから

船主集落をめぐる　デジタルスタンプラリー

地元伝統芸能「佐野踊り」

関西北前船研究交流セミナーとは

「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間～北前船寄港地・船主集落～」のストーリーで日本遺産に認定された北前船寄港地・49市町のうち、関西地区では、京都府宮津市、大阪府大阪市・泉佐野市、兵庫県神戸市・洲本市・赤穂市・高砂市・新温泉町・姫路市・たつの市、福井県小浜市の11市町が認定されています。

このたび、これら関西地区の寄港地が連携した共同事業として、「第4回関西北前船研究交流セミナー」を大阪府泉佐野市で開催しました。今回は共通するテーマで秋田県にかほ市にも参画いただき、関西と東北・新潟ブロックの交流を図ることで、両ブロックのストーリーや構成文化財の活用策について知見を深め、情報交換や交流の輪を広げていければと考えています。

基調講演　和歌山大学名誉教授　上村雅洋 氏

泉州の豪商食野家の金融活動と廻船

はじめに

近世の泉州地域は大坂市場に近接しており、様々な商品や廻船が行き交う地域でした。特に江戸ー大坂海運幹線の通り道で、全国的な商品流通と結びついていました。大坂に入荷される商品で一番多いのが米で、約半分を占めていました。米はそれほど重要な商品でした。そこに食野家は目をつけ、こうした立地を活かして海運業に関わりはじめました。

佐野の食野家が豪商に育っていく成長要因は二つあり、ひとつは大名貸を中心とした金融活動、もう一つは全国的な規模を持つ廻船活動でした。逆に言えば、これがうまくいかなくなると衰退する要因となっていくわけです。

三井、鴻池や住友のように勘定帳が揃っている場合と比較し、食野家には残念ながらそういう経営史料は残っていません。従って、利用した史料は断片的な借用証文類がほとんどです。それでは、食野家の大名貸と廻船業について話を進めます。

食野家とは

食野家は武士を捨てて商人になったとよく言われます。楠木正成の子孫であるという話も伝わっています。しかし、食野家に残る史料として土地の売券が二、三十通あり、その中に天正15年の土地屋敷の売券があります。天正15年は江戸時代より少し前の織豊期で、食野家が佐野に屋敷を構え、土着した時期が分かります。故に中世の土豪から延々と続き、近世に入って活躍するという訳ではありません。

もう一つ、食野一統を形成することが挙げられます。食野一統は、食野次郎左衛門家という本家と食野吉左衛門家という有力な二本柱に加え、重右衛門家や庄右衛門家等、そして唐金家や矢倉家等で構成されます。これらは複雑な姻戚関係にあり、食野一統として活動していきます。

これは文政5年の「日本持丸長者集」という長者番付ですが、西の小結に飯佐太郎と記載があり、大関小結は三井、住友です。東の大関には鴻池と書かれており、大豪商と並べ称されるものとして食野家が取り扱われていることが分かります。

日本持丸長者集（上）、諸国家業じまん（下）

同じような長者番付ですが、「諸国家業じまん」の左側は地方の豪商の欄で、関脇に食野佐太郎が選ばれています。注釈には大船80艘、金銀道具数知れずと書かれ、大船80艘は眉唾ですが、大きな船を所有して活躍していたことが分かります。右側の三ケ津は京、大坂、江戸のことで鴻池、三井、天王寺屋等の豪商が並んでいます。

食野家は、元禄から享保期、17世紀後半から18世紀にかけて活動し、本家次郎左衛門家の当主3代、4代目のときに富を蓄積します。19世紀になって衰え始め、幕末には衰退するというストーリーになっています。この絵は8代目、元珉の像です。

次郎左衛門家８代目「元珉」

次の表は有力分家・吉左衛門家の歴代当主で、初代の吉左衛門家は次郎左衛門家2代目の息子になります。次郎左衛門家2代目の息子のうち、兄が初代吉左衛門、弟が次郎左衛門3代目となり分れていきます。こちらも元禄から享保期、17世紀後半から18世紀にかけて富を蓄積し、19世紀に衰え始め、幕末頃には相当苦労する状況になっていきます。

代	名	存命期間	法名
初代	吉左衛門	文禄4（1595）～延宝9（1681）	明治
2代	七兵衛	寛永10（1633）～宝永元（1704）	道力
3代	三次郎	寛文2（1662）～享保6（1721）	保貞
4代	次郎三郎	元禄12（1699）～元文4（1739）	保貞
5代	八十八	享保15（1730）～寛延元（1748）	保文
6代	九十郎	元文4（1739）～安永7（1778）	保明
7代	吉太郎	明和4（1767）～天明4（1784）	玲明
8代	重之丞	宝暦10（1760）～寛政7（1795）	保明
9代	吉之丞	安永9（1780）～文化5（1808）	保時
10代	万吉	寛政8（1796）～	恒保
11代	国蔵	文化9（1812）～	保国
12代	幾一郎	天保9（1838）～	
13代	保治	明治7（1874）～明治43（1910）	
14代	文	明治31（1898）～	
15代	保夫	大正元（1912）～	

吉左衛門家　歴代当主

食野家の金融活動

食野家に残る借用証文から読み解ける動向をみていきますと、次郎左衛門家と吉左衛門家で計333点の借用証文が残されています。証文が残っているということは借金が返されていないということです。これを分析することで、多く貸し出して勢力がある時期や、貸せなくなって勢力が衰えている時期が見えてきます。

333点の借用証文を合計すると、金７万4999両、銀3142貫目は金に換算すると約5万両で、合わせて12万5000両以上の債権を持っていたことが分かります。変動するものの、金1両は銀に換算して60匁、金1両を現在価値に換算すると、米相場からは6万円となります。昔は米が貴重でしたが、現在ではもっと低く評価されます。

一方、労働賃金で換算すると30万円。昔は人件費が安かったですが、現在では高く評価されます。そこで両者の中間辺りを採

用して、1000両で1億から2億円位のイメージをもてばいいと思います。借主別平均貸付額ですが、一件につき大名へは1000両余り、家臣へは130両余り、商人へは家臣より多い水準を貸している実態がみえてきます。

次に時期別の傾向をみていきます。元禄年間より古い証文は残っておらず、18世紀以降25年ごと7期に区分すると、元禄14年から享保10年までの25年間が72件で最も多くなっています。その後増減を繰り返し、嘉永4年から幕末には9件と傾向的に少なくなっています。月別では正月を控え金銭需要が高まる12月が飛び抜けて多く、貸付先として岸和田藩はもちろん、本荘藩、津和野藩など全国各地の大名に貸していることが分かります。

次に食野家借用証文一覧表ですが、次郎左衛門家は稲葉丹後守に金銀合わせて1万7000両程、また岸和田藩家臣にも貸していることが分かります。吉左衛門家では亀田藩や仁賀保領に貸し付けています。元禄14年からの25年間が72件で最も多く、幕末にかけて少なくなっていきます。両家合計で金銀合わせて12万5000両位の借用証文があったという訳です。

	借主	時期別件数								金額
		1701～	26～	51～	76～	01～	26～1875		不明	
次郎左衛門	牧野備後守				4	2				1500両・457貫188匁
	佐竹山城守						4			13両・ 8貫500目
	久留島伊予守						3			24貫500目
	立花飛騨守		6							2400両・ 51貫300目
	松平周防守						2			8貫700目
	稲葉丹後守	4		7						14700両・182貫978匁
	阿部伊予守			1						902両・76貫128匁
	津和野藩						1			150両
	岸和田（家臣）	1	18	8	10	8			16	1408両・656貫295匁
	商人	1	3			1			2	962両・ 76貫129匁
	村					1				500目
	不明	5	14	7	15	18	2	1	25	1330両・206貫992匁
吉左衛門										
合計	333	72	52	30	37	43	22	9	68	74992両・3142貫969匁

食野家借用証文一覧表

昭和4年調査の「食野家関係資料」によりますと、29藩に138通の大名貸証文があります。秋田の佐竹、岸和田の岡部、生駒に加えて、尾張や鍋島など全国各地の大名に貸し付けていることが分かります。

次に加入貸についてみていきます。加入貸とは、両替商が大名に貸し付ける際に利率や期限といった条件を取り決める一方で、両替商、枝主は出資者を見つけ共同して貸し付けることです。なぜ加入貸をするかというと、現在価値で数億円という高額を貸すにあたりネットワークを築いて資金調達し、得た利益を出資比率に応じて分配。また貸し倒れというリスクを分散する目的もありました。

加入貸の仕組み

廻船でも同じ仕組みがあります。千石船だと1000両ほどします。それを一人で買うのは無理なので、廻船加入という仕組みで資金調達します。船は難破するリスクがあり損害額が大きくなるため危険分散し、利益が出れば出資比率に応じて分配して、現代の株主を募り会社組織で運営するようなシステムを構築していました。

吉左衛門家の加入貸がどういうものだったかをみると、時期的には享保年間に集中しており、金額は20から100貫目が多く、中には150貫目という巨額もあり、合計すると2万両となります。枝主はほとんどが助松屋で、加入率は30～50%です。大名貸だけではなく商人にも貸しており、助松屋を通じて食野家に蓄積された資金を大坂の金融市場に送り込んでいました。現在の大手銀行に貸し付けるのと同様のことをしていたわけです。

吉左衛門家の加入貸付表を見ると、一行目は小笠原信濃守に助松屋を通じて20貫目を貸し加入率は50%であること、時期的には享保年間が多いことが分かります。

年代	加入貸金	貸金総額	加入率	枝主	貸付先
宝永2.12	20貫目	40貫目	50%	助松屋忠兵衛	小笠原信濃守
宝永2.12	8貫目	15貫目	53%	同	同
宝永2.12	10貫目	20貫目	50%	同	同
正徳元.7	25貫目	50貫目	50%	同	京都吉田好意老御請所
正徳元.11	25貫目	100貫目	25%	同	京都辻次郎右衛門
享保元.12	15貫目	30貫目	50%	同	柳川御屋敷
享保3.5	57貫240目	150貫目	38%	同	旭川御屋敷
享保3.5	51貫200目			同	同
享保3.7	4632両・2匁7分			同	松平下総守
享保3.8	2200両			同	同
享保4.4	30貫目	80貫目	38%	同	吉文字屋善五郎
享保4.4	12貫500目	77貫500目	16%	同	福嶋琪清守
享保4.12	2貫500目	15貫目	17%	同	小笠原近江守
享保4.12	12貫500目	25貫目	50%	同	小笠原御屋敷
享保3.12	52貫431匁			助松屋次郎吉廻代	明石屋庄右衛門
享保4.12	1貫241匁			助松屋茂兵衛	
享保9	250両			同	
宝暦2.6	172両・22貫464匁			同	
宝暦10.12	11貫111匁			筑後御屋敷	
宝暦13	8貫目			讃岐高松御屋敷	
明和3.9	57貫308匁	19貫251匁	6%	肥後蓮池御屋敷	
天明4	100両			松平和泉守	
	114貫343匁			助松屋清兵衛	
合計	7679両・777貫862匁				

吉左衛門家の加入貸付表

そして、次郎左衛門家も同様のことをします。こちらの方が多額で、中には1万両を超え、金銀合わせて17万両にも及びます。枝主は近江商人の岡田小八郎のほか三井、武留、辰巳屋といった商人を通じて、尾州徳川等の大名に貸しています。

次郎左衛門家の史料では加入率の記載がなく分かりませんが、時期は享保10年から10数年が多く、天保期以降は極端に少なくなります。佐野という地方市場に蓄積された資金が、加入貸によって中央の金融市場と結びついて有効に活用されていたことが分かります。

次に領主である岸和田藩との関係を見ていきます。岸和田藩とは緊密な関係にあり、藩札の札元となり岸和田藩の財政に関与していきます。弘化4年には、明和年間までの貸付25万両と米1万1千石を永上納、つまり不問とする代わりに、以降については証文に基づき返済するよう整理しました。但し明和以降の証文は41件12万両に積み上がりうまくいっていません。

岸和田藩　藩札

項目	年代	金額
永上納金	入国後正德年迄出銀上ケ切	123350両
	明和6・7年分上ケ切	御米5000石
	安永2・3・4年後分上ケ切	御米6750石
	享保年より明和初迄出銀上ケ切	130000両
証文	明和年間（2件）	33両
	安永年間（3件）	244貫 12匁7分7厘
	天明年間（2件）	122貫857匁1分4厘
	寛政年間（5件）	200両・203貫836匁6分6厘
	文化年間（8件）	3050貫864匁5分3厘
	文政年間（18件）	2643貫104匁9分2厘8毛
	不明（3件）	879貫43匁8分6厘
	小計	233両・7143貫719匁8分8厘8毛
	合計	253583両・7143貫719匁8分8厘8毛 御米11750石

岸和田藩　永上納金

岸和田藩との関係として、食野家は享保4年に年貢米の売り払いを担う御蔵役を務め、文政11年には年貢米収納改革の賄方として協力要請を受けます。その見返りとして、岸和田藩は食

野家に対して天明7年以降の吉左衛門家の屋敷地の地代免除や次郎左衛門家・吉左衛門家ともに50人扶持を給して侍の身分を与えています。

また、岸和田藩の家臣との関係を見ていきます。「岸和田藩貸附証文」によりますと、家臣75人に合計5000両近くを貸しています。貸付先のトップは1300石の家老久野三郎兵衛で1100両、平均すると一人当たり63両余りです。時期的には享保辺りが最も多く、時代が下がるにつれ減少していきます。借用理由は江戸への参勤交代、妻の出産等で、返済方法は翌年の年の暮れに支給される切米（給与）等でと、取り決められています。

次に近隣諸村との結びつきとして郷貸というものがあり、村名義で年貢米を抵当にした大名貸のことです。ほかに農民貸があり、近隣農民が持つ農地を抵当に貸し付けを行うというものです。質に入れると流れるのは当たり前で、地主は食野家に代わり寛政元年には合計で109筆15町、作徳米（小作米）は180石にもなりました。

また漁民貸も手掛けており、天明7年の証文によると米高難渋のため銀5貫目を貸し付けましたが、約束通り3年後に皆済されたとあります。そのほかにも食野家は、岸和田藩の命に従い佐野村の新田開発に尽力するなど、在地性の強い側面があったということが分かると思います。

食野家と廻船業

次に二つ目のテーマについての話をします。食野家が、大名貸をするまでに富を蓄積したメカニズムを考えてみようという訳です。

先ほど話しました通り、食野家は年貢米の輸送に目をつけます。年貢米は藩が税として徴収したものですが、衣料等の消費財を購入するために大坂や江戸に運び高値で換金する必要があります。本荘藩、亀田藩、矢島領、仁賀保領で構成される由利諸藩はそれぞれ1～2万石の小さな藩の集まりで、仁賀保領平沢にある船問屋齋藤市兵衛家が仲介役を果たして、食野家は羽州由利諸藩の年貢米輸送を担うことになります。

食野家と由利諸藩との貸借関係をみていきます。残された由利諸藩への借用証文を集計しますと、4万3000両余り貸し付けていることが分かります。面白いのは明治4年、食野家は困窮し貸付金を取り立てなければならい状況になっており、本荘藩への貸付未収額を集計しています。貸付時期は享保年間に集中しており、元金総額は2万8000両余りで年利1割、貸付期間は147年から最大186年で金利計算を行い、元金2万8000両に対し利子が21万両と元金の7.6倍になると計算します。

年代	期間	年利率	元金	利金
享享.11	186年	1割	616両2分・16匁7分	11466両3分2朱・310匁2分2厘
享保3.9			9470両3分・13匁3分7厘	年賦金也
享保5.3			4585両1分・3匁3分6厘	同断
享保9.1	148年	1割	172両2分	2253両
享保9.2	147年11月	1割	170両2分2朱	2510両
享保9.3	147年10月	1割	168両3分	2482両1分1朱
享保9.3	147年10月	1割	34両　2朱	501両
享保9.3	147年10月	1割	81両	1191両2分
享保9.4	147年9月	1割	166両3分2朱	2454両2分1朱
享保9.4	147年9月	1割	165両	2426両3分3朱
享保9.4	147年9月	1割	281両1分	2136両3分2朱
享保9.閏4	147年9月	1割	135両	1985両2分3朱
享保9.5	147年8月	1割	26両3分・7匁5分	393両1分3朱・110匁3分1厘
享保9.6	147年7月	1割	161両1分	2371両2分
享保9.6	147年7月	1割	8776両　・　5分1厘	29068両2分2朱・75匁
享保9.6	147年7月	1割	3816両2分・　6分3厘	56129両1分　・98匁6分5厘
合計			28828両　2朱・41匁9分	219372両　・588匁5分8厘

本荘藩貸付高

普通でしたら貸し倒れとして引き当てるところ、このような計算をすること自体、経営感覚がずれていると言わざるを得ません。岸和田藩に対して明和年間に永上納しましたが、ここではずっと債権を保有していたことになります。そして、本荘藩を含む4つの由利諸藩に対する貸付未収額は元金だけで金9万2000両、銀431匁、米5万8000石となり、亀田藩が過半を占めています。明治4年にこれだけの不良債権が残っていたということです。

貸付先	金	銀	米
生駒主殿	4037両3分	170匁5分	60石　6升
同　主税	8161両		
六郎伊賀守（本荘）	28831両1分2朱	41匁9分7厘	
仁賀保又四郎	3441両	14匁3分6厘	2128石5斗
同　内記	1284両3分	〃	
同　孫九郎	1142両		
岩城左京太夫（亀田）	55515両3分	211匁7分9厘	56903石
合計	92969両3分2朱	431匁9分2厘	58991石5斗6升

羽州諸藩貸付高

次に、その米をどう運ぶかについてですが、食野家の廻船業者としての側面をみていきます。元禄12年の「浦々船数之事」には、佐野に600～700石積が7艘、300～500石積が81艘とあります。500石積であれば日本海へ出帆できるし、300石積でも瀬戸内海を帆走できます。大型廻船が佐野に多数存在し、恐らくその半数以上は食野家が所有していたものと思われます。

井原西鶴の「日本永代蔵」にも、泉州食野一統の唐金家が大船を所有し、北国の海から大坂に米を運ぶ商売をして栄えているという記述があります。

井原西鶴『日本永代蔵』（貞享5年、1688）

近代、泉州に唐かね屋とて、金銀に有徳なる人、出来ぬ、世わたる大船をつくりて、其名を神通丸とて、三千七百石つみても、足かろく。

北国の海を自在に乗て、雄波の入湊に、八木の商売をして次第に、家栄へけるは、諸事につきて、其身、調義のよきゆへぞかし」

→泉州、唐金屋、大船、北国の海、大坂入津、米商売

享保4年、亀田藩が食野家等に差し出した証文「前金請取申手形之事」は、来春の亀田蔵米2万俵を江戸へ輸送することを依頼したものです。米は秋に収穫しますが、廻船は冬季に日本海を航海することができず、翌春に運ぶことになります。そうすると、米が江戸に到着するまで換金できず、江戸藩邸で生活する現金がありません。

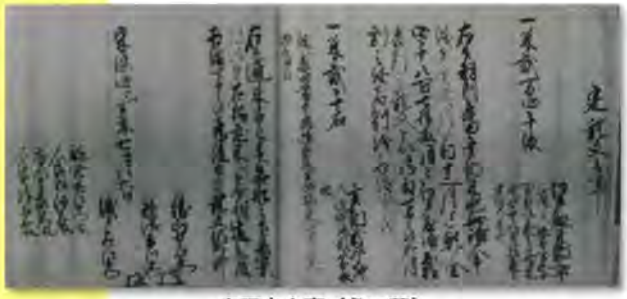
そこで享保4年正月に前金として235両を受け取り、米の到着後に返済する約束を交わします。廻船が江戸へ到着するのは夏頃になるので、繰り返し前金を受け取ることになります。実質的には、蔵米を抵当にした金銭貸借関係にあるといえます。

証文「前金請取申手形之事」

さらに享保4年7月の「定証文之事」には、亀田藩の蔵米2万4000俵を江戸藩邸費の調達分として江戸に廻米することを記しています。運賃は米8880俵で支払うことを約し、運賃比率は

37%となり、当時この距離の運賃は3割弱が一般的であったことからすると、かなり高額であると言えます。

しかし、よく考えると届ける米が１万5120俵で、運賃米8880俵は自らの米を運ぶことからすると58%の運賃を受け取っていると解釈することができ、食野家が巨額の富を蓄積した一端が伺われます。ただでさえ高い運賃に加え、正月から12月まで4870両を月々、江戸屋敷で前もって支払う約束もしています。さらに、国元の経費分として蔵米8000俵の売却も約束しています。



定証文之事（亀田藩）

また、安永9年の「米売附前金請取申手形之事」では、羽州仁賀保藩の米を12月に購入する契約を結び、食野家が前金を支払って、翌年3～4月に手船を羽州へ廻して米を受け取り、江戸・大坂へ廻送すると定めています。

次に天明元年から文政11年にかけての羽州諸藩米輸送状況ですが、平沢の齋藤家によって集荷された年貢米は平沢産米がほとんどですが、毎年、食野家の手船で江戸・大坂へ輸送します。手船で間に合わない場合は加州大野の廻船を借りる場合もありましたが、輸送量は年代が下がるごとに低下していきます。

年代	蔵米	俵数	1俵に付	1両に付	代金
天明元	平沢	6500俵	3斗3升	1石9斗4升5合	1117両3分・24匁7分9厘
天明2	平沢	5771俵	3斗3升	1石6斗	1390両　・21匁1分2厘
天明3	平沢	4143俵	3斗3升	1石3斗1升	1043両2分・16匁9分6厘
天明4	平沢	2793俵	3斗3升	9斗7升	949両3分・14匁4分5厘
天明5	平沢	4873俵	3斗3升	1石2斗8升5合	1251両1分・20匁2分6厘
天明6	本庄	1215俵	3斗5升		300両
同	本庄	300俵	3斗6升		118両3分・　1匁8分9厘
同	亀田	200俵	2斗5升7合5勺		
同	平沢	4383俵	3斗3升	1石1斗4升5合	1263両1分・　4匁9分
天明7	平沢	4727俵	3斗3升	1石2斗	1529両1分・22匁2分5厘5毛
天明8	平沢	5624俵	3斗3升	1石2斗8升5合	1444両　・27匁5分6厘
寛政元	平沢	5756俵	3斗3升	1石2斗8升5合	1478両　・21匁2分7厘
寛政2	平沢	4960俵	3斗3升	1石3斗3升5合	1226両3分・　5匁2分2厘
寛政3	平沢	7542俵	3斗3升	1石7斗7升5合	1402両　・10匁7分7厘
文化6	平沢	5365俵	3斗3升	1石2斗3升5合	1418両2分
文化7	平沢	2300俵	3斗3升	1石5斗5升5合	492両3分
同	本石	400俵	3斗6升		94両
文化8	平沢	3000俵	3斗3升	1石6斗5升5合	610両1分

羽州諸藩米輸送状況

食野家は大名貸を続けてきましたが、明和年間頃から食野家と羽州諸藩との関係は円滑にいかなくなっていきます。食野家に廻米してもらわないと羽州諸藩は困りますから、本荘藩が食野家との関係を取り繕ってもらうよう、齋藤家に尽力を要請しています。

次に、日本海に見る食野家の廻船ということで、但馬国今子浦の入津記録からみてみます。食野家が最も活躍していた享保4年から11年に延べ487艘、年平均60艘の船が入ってきており、その内訳は摂津106艘、越前74艘、讃岐68艘、加賀53艘に続いて泉州が49艘、そのうち佐野が35艘と記録されています。さらに佐野の内訳をみていくと、食野20艘、唐金7艘、矢倉5艘と食野一統の勢力が伺えます。食野家は、北は秋田まで進出し、上方から綿製品を中心とする様々な物品を輸送し、帰路には北国米を廻送していました。

「但馬国今子浦諸国入船帳」における享保4年の食野一統の入津記録をみると、3月から6月にかけて千石船に近い船が入っており、最低15艘の大型廻船があったことが確認できます。実際には30艘ほど所有していた可能性がうかがい知れます。越後国出雲崎の廻船業・熊木屋の「永代御客帳」をみると、享保2年以降に和泉国佐野の食野次郎左衛門や食野吉左衛門、矢倉の廻船がお客として来ているとの記録があります。

但馬国今子浦諸国入船帳

酒田の沖合40kmにある飛島村に残る延享元年「客扣」という史料には、食野家の800～1200石積の大型廻船が年に2艘程度、3～4月に寄港していることが記録されています。

酒田　飛島村「客扣」

同じく飛島村の寛政5年「御客船控帳」には、食野次郎左衛門家の大型廻船が寄港していることが記録されており、寛政年間の終り頃まで5艘の大型廻船が繰り返し寄港していることが確認できますが、それ以降は日本海各地の客船帳を見ても食野家の廻船はほとんど出てこなくなり、衰えていったことが分かります。

飛島村「御客船控帳」

最後に、食野家の廻船活動の衰退について説明します。

天明5年、鴻池や三井と同様に7万両程の御用金を課された際の「御用金赦免願案」によりますと、以前は30艘もの廻船を所有し諸国の米を買い入れていたが、16年前に6艘が破船し米船とも失った。その後も毎年のように破船し新船を建造することもできず、天明年間には5艘ほどまで減少し所持金がない、との記載があります。

同じく天明5年12月の「御用金容赦願」には、近年困窮しているものの公務をたびたび命ぜられ、やむを得ず仕事に務めてきたが、現在は貸家経営とわずかな廻船で活動している、との理由が書かれています。容赦願ですから眉唾的な節がありますが、19世紀には現実的なものになっていきます。そして、ついには大名貸も廻船業もうまくいかず、衰退を迎えることになります。

私の話は以上です。

基調講演　弘前大学名誉教授　長谷川成一 氏

出羽国平沢（ひらさわ）齋藤家の経営と泉佐野食野家

出羽国平沢とは

本日は、「出羽国平沢齋藤家の経営と泉佐野食野家」というテーマでお話をさせていただきます。西日本の皆様には平沢という地名にはあまり馴染みがなく、平沢（たいらざわ）とかいろいろな読み方をされますので、正確な地名平沢（ひらさわ）とルビを付しました。

出羽国平沢とは現在の秋田県にかほ市平沢であり、江戸時代には旗本・仁賀保氏領に属し、湊町・羽州街道の宿場町として繁栄した土地です。2018年5月、日本遺産の一つとして認定されました。ここでは、江戸時代からの歴史資料を所蔵する同地の旧家齋藤家の資料を基に同家の経営についてお話しします。

『地図中心』 571

現在の齋藤家

平沢の齋藤家は、船問屋と酒造業を手広く営んできた歴史を持ちます。現在の同家は銘酒「飛良泉（ひらいずみ）」を醸造する秋田県内でも有数の酒造メーカーであり、現在の社長・齋藤雅人氏は26代目に当たります。齋藤家は代々「市兵衛」を名乗り、屋号は「泉屋」です。にかほ市と泉佐野市が協定都市として協定を結ぶ際、齋藤氏も立ち会ったとのことです。

また、齋藤家は15世紀、出羽国へ泉州から入ってきて、食野家とは同郷であるという伝承もあります。20、30年前に齋藤家の所蔵資料を調査した際には、この同郷を示す資料は確認できませんでしたが、齋藤家のアイデンティティになっていることは間違いありません。資料の中で最も古いものは、秋田県内でも有名な天正16（1588）年閏5月の古文書であり、大半は江戸時代から近代にかけての同家の経営資料です。

飛良泉本舗社屋（上）と屋内の様子

5年前、にかほ市での講演の機会に齋藤家の蔵を数十年ぶりに拝見した際、「蝦夷錦」を確認できましたが、これは今後注目されるのではないかと思います。

戦国期の平沢地域―真宗教団の北上と由利郡

「藤原姓菊池弥高山菊池院浄願寺系譜」によると、蝦夷島に北上する浄土真宗の教線の一環として菊池氏四代「了乗」が16世紀後半、塩越、現在のにかほ市象潟町に浄専寺を建立。そして16世紀末、金浦に浄蓮寺、船越や能代、庄内の酒田等に浄土真宗の寺院を建立しました。

16世紀において、塩越、金浦が蝦夷島に向けて北上する浄土真宗の教線拡大の拠点だったことが認められます。この両地は南から北への人・信仰・物の流れを司る重要な港湾都市として、この地域が押さえられていたということです。また、中世史の研究者なら周知の「海の有徳人」と呼ばれる集団が、蝦夷島に向けての教線拡大を担ったのです。

17世紀初頭　山形最上氏支配時代の平沢と齋藤家

近世に入り由利郡は17世紀初頭、最上氏の支配下に入ります。その時代の平沢の齋藤家については、最上氏の関係資料にも出てきます。同家は元和6（1620）年11月、平沢問屋宛の本城満茂家臣の掟書によると、伝馬・荷駄問屋として平沢村の陸上輸送に責任を持たされ、鱈船役を免除されています。慶長から寛永にかけての「奥州羽州図」には、平沢、塩越が陸上交通の一環として描かれています。最上時代の齋藤家が海上輸送や海運事業に従事していたという資料は、今のところ見当たりません。

江戸時代の平沢と仁賀保氏

元和８（1622）年の最上改易後の出羽国由利郡は基本的に大名領、旗本領と幕領が入り組んだ支配となり、平沢は旗本・仁賀保氏の領地となり陣屋が置かれました。郡内の大名領としては2万石六郷氏の本荘藩と岩城氏の亀田藩、そして旗本領としての仁賀保氏、交代寄合の生駒氏がありました。

仁賀保氏は、当初1万石で由利郡に入部しますが、後に当主の良俊が亡くなって分割されることになり、7千石が幕領となりました。そして仁賀保氏は二千石家と一千石家の二つに分かれ、ともに陣屋をこの平沢に置きました。旗本の当主は必ず江戸に居らねばならず、平沢における陣屋では仁賀保氏の大体10人位の家臣・給人たちが統治にあたりました。

仁賀保郷の四湊

当地域の湊としては仁賀保郷四湊があり、寛政元（1789）年の齋藤家文書によると、古来、「商船入津」の湊は平沢村・三森村、本荘領の金浦村・塩越村の四カ所の湊であると記録されています。先ほどの浄願寺文書の中でも、金浦と塩越が戦国期に

港湾都市として認められており、中世以来の湊を基礎としつつ仁賀保郷に四つの湊が存在していました。中世以来の系譜を継いでいることを、ここで確認しておきます。平沢湊は規模的に二百石積み船舶の入港は可能ですが、三百石積みの船舶になると入港は不可能で、平沢のすぐ南にある隣の鈴村の湊が使用されました。

齋藤家について

さて、嘉永5（1852）年の上申書によると、齋藤家は代々、平沢の町方で宿老を務め大庄屋に任命される家柄でした。平沢の町方において、有力な存在であったということです。天明8（1788）年の訴状によると、寛永年間に領主仁賀保氏の命令で齋藤家は「問屋船宿」を開始したと書かれています。同家には「千秋丸」「明神丸」という持船もあり、船問屋として活躍する一方、食野家や酒田本間家と結んで岩城・生駒・六郷の各領主の財政に深く関与しました。金融活動を営む傍ら、近世後期から幕末にかけて仁賀保氏から250石の酒造免許を得て酒造業も営んでおり、現在の飛良泉本舗の核になる部分はここで形成されたと言えます。

この時代の齋藤家は、領主的な要請すなわち仁賀保氏からの命令で「船問屋」稼業に乗り出し、仁賀保氏のみならず本荘藩・亀田藩、近隣の諸領主の領主蔵米や雑穀などの諸品を売却し、大名貸も行っていたということです。

仁賀保氏と食野・齋藤家の取引～「米売付前金請取手形之事」から見た実態

安永4（1775）年12月の「米売付前金請取手形之事」の文書があります。これは齋藤家文書ですが、この内容から取引の実態を見ると、同年に食野吉左衛門家の手代である食野久兵衛が齋藤市兵衛とともに出羽国由利郡で二千石家の仁賀保氏との間で、年貢米5269俵余りを買取る契約を結び、仁賀保氏は前金982両を受取るという証文を交わしています。

ご存知の通り、冬の日本海は非常に荒れるため廻船は航行ができません。年貢米は翌年3、4月頃に出羽国に来航した食野吉左衛門家の船舶に渡されますが、江戸暮らしをしている仁賀保氏の江戸屋敷では当座の金が必要ということで、1000両近い大金を仁賀保氏に貸したことになります。吉左衛門家は、購入した年貢米を自らの裁量で各地で売りさばくことができるという仕組みになっていました。

齋藤家と食野吉左衛門家

各史料の中で齋藤市兵衛が「羽州由利平沢食野宿」と肩書きされているように、齋藤家と食野家との商売上の深い繋がりが伺われます。齋藤家は、「宿齋藤市兵衛」とか「平沢宿齋藤市兵衛」云々と記載されており、各大名家から食野家への蔵米の売却額は巨大であったことから、その仲介による口銭は齋藤家にとって多大なものであったと想定されます。食野家は齋藤家のような日本海側の有力商人と取引をすることで経営をさらに発展させ、一方の齋藤家にとっても食野家を通じて大坂や江戸と繋がりを持てる絶好の機会でした。食野家のような豪商と結びつくことで、齋藤家も商圏を広げていったのです。

齋藤家の仁賀保氏への貸し付け

齋藤家も仁賀保氏への貸し付けを行っており、明和4（1767）年の証文によると300両を仁賀保氏に貸し付けて、年貢米がその返済に充てられることになっています。これは典型的な大名貸しですが、現金は江戸の食野与四兵衛から仁賀保氏の江戸屋敷に渡されます。ここにおいても資金の運転というか回転というか、その中に食野家が介在し、平沢湊に着岸した食野船に年貢米は積み込まれました。

仁賀保氏は借金を重ね、真偽の程は分かりませんが、返済が何回も滞り、挙句、領民の田畑・家財が市兵衛に差し出されることになっていたとか。これは幕藩体制下ではあり得ないことですが、それほど仁賀保氏の財政窮乏は極限状況になっていたのでしょう。食野家が大名貸しをした主な領主は、東北地方では本荘や亀田、秋田、新庄の各藩、交代寄合の生駒氏や旗本の仁賀保氏などです。

齋藤家と佐野湊浦の活動範囲

佐野湊浦の船舶の活動範囲と齋藤家の取引先を比較すると、佐野湊浦では北は秋田辺りまでの活躍が認められるのに対し（『新修泉佐野市史　通史編２・３』清文堂　2005年）、齋藤家は秋田より北の津軽、蝦夷地が目立ちます。同家は、日本の北方域との取引が盛んであったと言えるでしょう。

「仕切帳」から見た齋藤家の商取引

18世紀後半の齋藤家の「売買仕切帳」を分析した結果、同家と取引関係があった地域は、移入・移出ともに北は蝦夷地から南は泉佐野、讃岐三本松までの、主として日本海沿岸であり、とりわけ蝦夷地から越前までの取引が濃厚に認められます。九州や太平洋沿岸の地方は対象となっていません。

齋藤家の移入・移出品～移入から見た地域と交易品

移入品から見た地域と交易品としては、木綿・古手・繰綿などの衣料品・衣料材料などとともに、にしん類、身欠きにしん、数子、塩引などの海産品、蝦夷地や津軽地方における北方の産品の種類や量が圧倒的に多くありました。その他、茶・砂糖・輪島素麺といった食品、檜材、蝋が見られます。越中より西の能登、加賀、越前などでは、唐傘や茶釜、塩など上方の手工品が目立ちます。

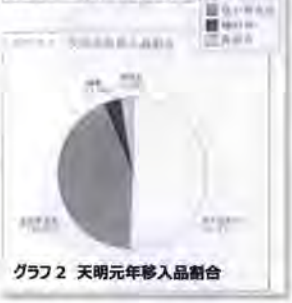
泉佐野からは、傘・線香など、そして極上白木綿などです。現在の泉佐野市においては、タオルの製造業が盛んであるということを聞き、恐らく現代の産業に結びつく技術の芽が、江戸時代のこの時期に発生しているのではないかと想像されます。

移入品の取引割合～主な移入品の状況

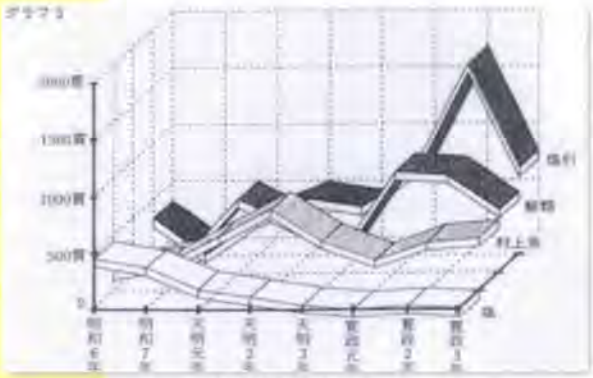
移入品の取引割合としては、取引額から見ると衣料品等が40～50%、塩引やにしん類等の食品類が同じく40～50%、残りがその他です。円グラフは上が明和6年、下が天明元年であり、15～6年間でほとんど差はありません。

主な移入品としてはグラフは食品類の中でも大きな比重を占める塩引・にしん類・村上茶・塩の移入高の推移を示しており、この中で齋藤家による村上茶の購入はコンスタントに行われており、にしんや塩引等の蝦夷地や津軽の産品に匹敵する額を、村上茶が占めています。

グラフ１　明和６年移入品割合



グラフ２　天明元年移入品割合



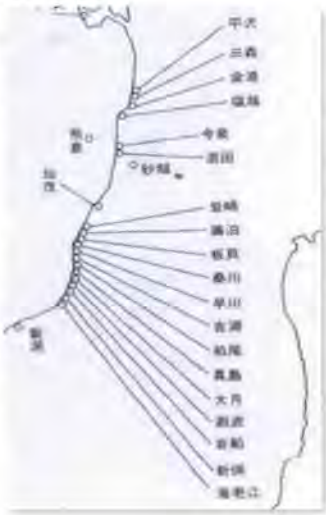
主な移入品の状況

蝦夷地、津軽・下北地方との取引状況

各地域に絞って見ると、蝦夷地では松前・箱館・江差などの有力な湊からは、身欠きにしん・数子・串貝などの北方特産の食品が出されています。津軽では下北地方も合わせ、やはり北方産品が多く、特徴的なのは檜の売買があります。「檜」というのは、西国では普通の檜が思い浮かべられますが、藩政時代に津軽地方で「ひのき」と呼んだのは「青森ヒバ」のことを指します。青森ヒバの移入・移出が多く行われました。

鰺ヶ沢や小泊といった日本海沿岸地域は藩政時代、にしんの群来（くき）、いわゆる群れがやってくることが度々あり、「にしん」、「身欠きにしん」と言った場合、それは必ずしも蝦夷地産のものではなく、津軽やこの西海岸沿岸地帯産が入っているということも考慮すべきでしょう。下北半島は大体、津軽と同様です。

庄内、中・下越地方との取引状況



庄内、中・下越地方との取引では、酒田との取扱い量が多いですが、北方産品の他に衣料品がかなり多くあり、他に日用品も結構、多く入ってきました。

越後の岩崎など小規模な湊からは、村上と呼ばれた村上茶が運ばれてきました。村上茶については改めて話しますが、その他に衣料品や日用品類が入ってきました。

北陸地方等との取引状況

北陸地方からは、素麺・塩などの食品や繰綿・笠、茶釜などの日用品が移入されました。

村上茶について

先に触れたように新潟県北部の村上地方では小さい湊が密集しており、そこから村上茶が入ってきました。幕藩体制後期に入ると同地方では茶の生産が非常に盛んになり、由利郡に村上茶が入って来ました。

由利本荘市畑谷の豪農「高野家」の「売買諸色帳」によると、売り立ての目録の中でお茶が3分の1を占めており、村上という名前も見えます。これは由利郡内に、齋藤家からに限らず大量の村上茶が入ってきており、それが人々の食生活の中に入り込んでいたと考えられます。

齋藤家の移入・移出品～移出品から見た地域と産品

移出品から見た地域と産品ですが、齋藤家と取引のあるほとんどの地域へ由利郡内の米穀が移出されました。由利郡から同家を通じての移出品はほとんどが米穀類でした。これは藩領や旗本領に限定せず、町米や郡内の米穀が移出されたということです。仙北煙草、笹子煙草といった嗜好品を除けば、取引額の大部分を占めるのが米でした。これが、齋藤家の移出に関する特徴です。

齋藤家の商取引の特徴

齋藤家の場合、蔵敷料すなわち倉庫の保管料が仕切帳にほとんど見えません。原則として、蔵預かりを必要としない商売をしていたのではないかということです。寛政元（1789）年の資料では、平沢湊に入船があった際、入港船からの荷物と、入港船へ売却を企図した諸品については、齋藤家が商人たちを集め、秋田や庄内の湊の適正な相場値段で売買をしていたことが窺われます。

従って、取引の諸品を同家の蔵で長期間、保管するということをせず、品物はごく短期間に売り捌かれたことが判明します。適正な相場値段はどちらかと言えば、齋藤家にとって適正な相場値段であり、極端な値段をつけるわけにいきません。同家は、その相場を決めるための広範囲な情報網を持っていたのではないかと想像されます。

藩政時代の弘前に「金木屋」という豪商がおり、大坂はもちろん各地域の米の相場価格を広く集めていました。その意味でも北前船による商取引というのは、情報をいかに素早く正確に把握するか、それが大きなキーポイントになっていた可能性があると思います。

近世中後期の由利郡と齋藤家

藩政時代の中期以降、由利郡内では蝦夷地や北奥産の塩

引や身欠きにしん等の北方物産が蛋白源として、また一方の南からは、村上茶に代表されるお茶・衣料品等が、人々の日常生活に欠かせないものとなっていました。齋藤家の商取引は、由利郡の広くかつ農業生産性の高い土地柄に支えられ、人々の生活の仕組みを如実に反映していたとも考えられるでしょう。

齋藤家では、商取引の上で少々、勇み足といったことも行われまして、本荘湊の商人たちから訴えられたこともあります。が、こういうやや強引な商取引も可能であったのは、先ほど触れたとおり平沢の陣屋にいた仁賀保家の給人たちは10人位で、その人数で大体３千石ぐらいの土地を統治していた背景もあったと思います。

本荘藩2万石、亀田藩2万石は小規模な大名であり、生駒家も江戸住まいであって、多くの家臣らは江戸に詰めなくてはならず、齋藤家がこれだけ縦横無尽に活躍できたのは、郡内の領主の支配権力が他と比較して弱体で、取締りも緩い状況だったからではないかと想定されます。

おわりに

最後に、食野家とともに大名貸し、領主蔵米の売却等による多大な利益を財政基盤とした齋藤家の商業活動は、次のような特徴がありました。一番目に、平沢からの移出品は、嗜好品を除けば概ね米穀・麦などの穀物類や大豆類等であり、出羽国特産の杉材等とともに第一次産品が主流でした。

齋藤家を舞台に展開した商業活動は、第一次産品を移出し、北からはにしんや塩引など人々の蛋白源となる北方産食品を大量に移入します。同様に、南からは衣料品や村上茶の他、上方等で生産される日用品等を主に移入するという構造になっていたようです。

エピローグ

エピローグとして、院内銀山のオットセイと齋藤家所蔵の蝦夷錦の刀袋についてお話をします。

秋田藩の院内銀山で医師をしていた門屋養安は、有名な「門屋養安日記」という資料を残しています。院内銀山は17世紀初頭に開発された日本有数の銀山であり、それは江戸時代も繁栄して秋田藩のドル箱になっていました。多くの鉱夫たちが働き、一時は秋田の城下町よりも院内銀山の人口の方が多かったと言われるくらいの大規模な鉱山でした。

院内銀山には矢島を経由して、様々な物品が流入していました。中でも注目される記事が、同日記天保７（1836）年12月6日条にある「矢嶋よりおっとうせ売参候へ共、捌不申候」。塩漬けにされたオットセイを鉱山に売りに来たが、売れなかったということです。北方の動物のオットセイが鉱山にもたらされたということです。なんでオットセイなのかと不思議に思われますが、オットセイは当時、強壮剤として将軍や大名に珍重されました。弘前藩や松前藩が幕府への代表的な献上品としてオットセイを献上しています。

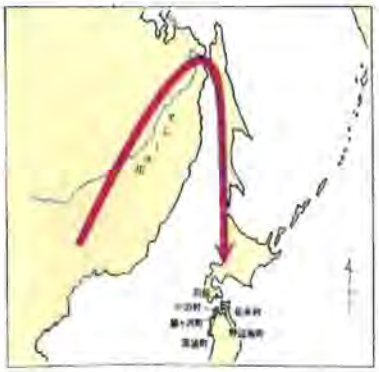
おそらく北方の珍品であるオットセイの塩蔵品は、齋藤家のような船問屋による日本北方域との交易を通じて由利郡に移入されたものと思われます。北方産品の一つの流通のあり方として紹介しました。

次に、齋藤家所蔵の蝦夷錦の刀袋について。2019年の齋藤家調査において、この刀袋が確認され、現在確認されている蝦夷錦の所在地の南限ではないかと推測されます。

蝦夷錦は、耳慣れない言葉かもしれませんが、江戸時代に山丹交易によってもたらされた交易品で、この色鮮やかな絹織物は蝦夷地渡りの布として当時、珍重されました。

蝦夷錦の刀袋（にかほ市齋藤家蔵）

中国の江南地方で織られ、本来、清朝の官服であったものです。山丹人からもたらされたものをアイヌが中継して、蝦夷地から南へと下って来た珍品でした。それゆえ、蝦夷錦が齋藤家に存在するということは、同家と北方世界との繋がりの深さを認識させるものとして、今後さらに研究の余地があるのではと考えられます。



『青森県史だより』2号（1997）

ご清聴ありがとうございました。

【参考文献】

- 『敦賀市史』史料編第5巻（敦賀市　1979年）
- 上村雅洋「泉州の豪商食野家の金融活動」（『大阪大学経済学』第31巻4号　1982年）
- 『本荘市史』史料編Ⅰ上（本荘市　1984年）
- 榎森進「日本海海運と酒田」（『地方史研究』184　1983年）
- 半田市太郎「羽州・平沢村問屋斎藤家の経営」（『秋田経法大経済学部紀要』第1号　1984年）
- 『新潟県史』通史編4（新潟県　1985年）
- 『本荘市史』史料編Ⅲ（本荘市　1986年）
- 『山形県史』第3巻　近世編下（山形県　1987年）
- 『本荘市史』史料編Ⅳ（本荘市　1988年）
- 『本荘市史』通史編Ⅱ（本荘市　1994年）
- 『特別展　江戸時代の泉佐野＝うら・みなと・まち＝』（歴史館いずみさの　1998年）
- 『小泊村史』中巻（小泊村　1998年）
- 長谷川成一「近世後期南北交易の中の由利郡」（渡辺信夫編『東北の交流史』無明舎　1999年）
- 『仁賀保町史　普及版』（仁賀保町教育委員会　2005年）
- 『新修　泉佐野市史』通史編2・3（清文堂　2009年）

トークセッション　両ブロック代表による両地のつながり　過去とこれから

パネリスト　上村雅洋 氏　（和歌山大学名誉教授）
長谷川成一氏（弘前大学名誉教授）
中岡　勝 氏（泉佐野市日本遺産推進担当理事）
齋藤一樹 氏（にかほ市教育委員会）
進行役　中野秀治 氏（北前船交流拡大機構）

中岡 勝 氏

齋藤一樹 氏

中野秀治 氏

中野　北前船交流拡大機構の中野です。直前はANA総合研究所に在籍し、北前船寄港地が2017年に文化庁の日本遺産に認定される前年、その認定の準備の年から関わってきました。初年度は11市町で認定を受け、その後追加申請で現在49自治体の連合体となっています。これゆえ49市町全てに訪問する機会があり、その構成文化財も見てきました。一般的な日本遺産は共通する文化財で構成されていると聞きますが、北前船はそれぞれに特徴のあるもの、魅力あるものとして残されている傾向があります。先ほどの佐野踊りも大変優雅な踊りで、あれだけ長い歌詞に感心致しました。

基調講演の上村先生、長谷川先生のお話は大変興味深く拝聴しました。食野家は残念ながら今は三井住友のような豪商として名前は残っていませんが、江戸期には日本を代表する豪商であったことを、各種の文書によって証明されていることをお話いただきました。上村先生からは、様々な資料を通じて資金力の豊富さをご紹介いただきました。また長谷川先生からは食野家とにかほの齋藤家の繋がりを掘り下げて、北前船の特徴である海を通して、いかに繋がってきたかというところを非常に興味深くご紹介いただきました。

ではこれより、北前船日本遺産推進協議会・関西ブロックの大阪府泉佐野市、中岡様。そして東北・新潟ブロックの秋田県にかほ市、齋藤様より、両地区の紹介や繋がりについて資料を交えながらお話をいただきます。

その後、私からこのセミナーの親会で現在49市町で構成される北前船日本遺産推進協議会と、北前船交流拡大機構の活動について簡単にご紹介をさせていただきます。その後、上村、長谷川両先生からもご意見をいただきながら、両地区に関するこれからの活動、あるいは今後についてトークセッションができればと思っています。

2020年の追加申請でこの協議会に合流され、現在、関西ブロックのリーダーをしておられる泉佐野市理事の中岡様より、豪商食野家、唐金家、船主集落佐野町場についてお話をいただきます。

中岡　泉佐野市教育委員会の中岡です。北前船交流拡大機構の中野様には認定のとき以来お世話になっています。また、にかほ市には数回訪問して様々な体験をさせていただきました。非常に関係の深いにかほ市とのコラボということで、今日は頑張りたいと思っています。

明治時代の佐野町場

それでは、北前船の船主で豪商食野、唐金の佐野町場を紹介します。佐野町場は南海泉佐野駅の海岸一帯の地区で、明治時代の絵図で中央に赤で太くなった道は孝子越街道です。それ以外の道については、非常に細かい地割が計画的ではなく自然発生的に作られたもので、これが現在まで残り迷宮都市とも呼ばれています。

泉佐野の佐野浦と湊浦という二つの浦を合わせた形で関係性を述べますと、佐野浦の佐野漁民については、長崎県の壱岐、対馬、五島や、島根県の隠岐にも浦の権利を持っており、これは豊臣時代からの関わりで佐野網衆というものが漁業権を取り、深い関係にあったということになっています。

食野家が活躍する頃になると、秋田県の仁賀保平沢や象潟に様々な資料が残っており、交流があったことが分かっています。象潟にある蚶満寺、浄専寺に食野家の墓があり、越野神社には絵馬を奉納したと言われており、関係を示すものがたくさんあります。一方、対馬、五島にも墓石があるほか、今も佐野屋というお店を営む山下家があります。

このように中世から近世にかけ全国に船を操った交流があり、西回りだけではなく、東回りについても江戸に向かって各地で関わりがあったことが分かっています。

この写真は、関西国際空港やりんくうタウンの埋め立てにより面影はありませんが、昭和30年代の浜の様子です。写真のイワシを干した干鰯を肥料として、岸和田藩の泉佐野では綿花栽培が盛んでした。長谷川先生のお話にもあったように、日本のタオル発祥の地となり泉州タオルのブランドが確立していくことに繋がるのではと思っています。

江戸時代の佐野浦

次に、江戸時代の佐野浦の様子が分かる絵図です。熊野街道や佐野浦が描かれており、いくつかある大きな屋根はお寺や神社であり、現在のお寺と同じものが描かれています。川は円田川かと思います。浜にはそれほど大きな船は来ていません。というのも、大阪湾の泉佐野辺りは遠浅であり、大船は沖で停め小さい船に乗り換えて浜に下していたという資料があり、それを物語るものかと思います。

食野家は楠木正成の末裔であるという言い伝えがあり、本家が次郎左衛門で、分家は吉左衛門他数家あります。加えて親戚関係にある唐金家や矢倉家等が海運業、大名貸し、地主経営をしていました。本家の子孫についてはかなり散らばっているとのことですが、分家の吉左衛門家の子孫については現在も泉佐野在住で、資料も保管されています。家紋は、引き違えばってんのような文様で、これが帆印になります。廻船業では多くの船を所有し、大坂の綿花や木綿、菜種油といったものを各地に輸送し、帰路に大名の蔵米とか鰊といったものを大坂や江戸に運び儲けたとことになっています。

食野、唐金家がいかに裕福であったかは、江戸時代に流行った長者番付がたくさん出ており、「日本持丸長者集」では西の小結、「諸国家業じまん」では諸国の関脇とあります。当時は大関が一番上のランクですので、すごい豪商であったことが分かります。

続いて、大名貸しのところをまとめた資料が「歴史館いずみさの」にあります。全国の諸大名に、さらに幕府や国にも貸しており、岸和田藩、紀州藩や秋田諸藩の証文がたくさん残っており、にかほ市の齋藤家が出羽の出張所的な拠点となっていたことも分かっています。

北前船の出発点は大坂、今の難波より西側の北堀江・南堀江付近です。道頓堀川の右岸、北堀江・南堀江に大小300か所位の家

や船倉を所有していたということです。唐金が作った汐見橋、それから唐金の屋号、橘屋に因んで付けられた立花通り、家具屋さんが昔はたくさんありましたがオレンジストリートという名前は、この唐金から付けられたと聞いています。更にこの堀江より北の此花区の方も開発し、後に春日出新田と呼ばれました。横浜市に臨春閣という重要文化財がありますが、それを紀州藩から買い受けて迎賓館にしていたと言われています。

一方、佐野町場にある食野、唐金家の本拠地について、食野家の屋敷そのものは明治8年に第一小学校の校舎の一部になりましたが、現在は全て建物はありません。台所にあったと言われる井戸の縁石、庭にあった紀州産の青石が「食野宅跡」という碑になっています（**表紙写真 参照**）。また、庭にあった松が残っていると言われています。

いろは蔵通り

食野家の周りにいろは蔵が48ありましたが、現在はわずか数棟が残るのみで、いろは蔵を伝えるために地元の和菓子屋「むか新」でいろは蔵という最中が作られています。

食野家の本宅跡の発掘調査では、ベトナム・中国の陶磁器やたつの市の「林田焼」といった貴重な遺物がたくさん出土しており、やはり貿易や中央との関係といったものが色濃く出てきていると言えます。

また、最も縁が深かった藩は岸和田藩であり、藩札の発行や藩の財政改革に深く関わったと言われています。今に残る記録から、食野次郎左衛門と吉左衛門の二家が関わったと聞いています。

食野家の最盛期は、元禄から元文期の1688～1740年頃ではないかと言われており、その後経営は18世紀後半から次第に衰退し、幕末から明治にかけては大名の財政難により大名貸しが焦げ付くとともに、廻船による回収もままならないという状況で、大名からお金が返されなくなった証文は約300万両分あると聞いています。今のレートで、おおよその金額として2000～3000億円が返済されなかったわけで、その結果、泉佐野にある屋敷や大坂の土地・屋敷は売却され、ほとんど残っていないとのことです。

ここからは様々な形で残るものを見ていきますが、書物に残る有名なところで1688年の井原西鶴「日本永代蔵」。1853年の貝原益軒による「南遊紀行」という本には、佐野浦湾、民家1000件と非常に多くの人が住み賑やかであったことが書かれています。民家は瓦葺きで、非常に裕福な集落であったことがこれで分かります。

文芸関係に残る食野、唐金家としては、加賀の銭屋か和泉の食野かと謳われたざれ歌が残っています。先ほどの佐野踊り、佐野くどきや、落語に「莨の火」というものが語り継がれています。これは鴻池家と姻戚関係があったため、豪遊したときの食野の当主の話になります。その他に、川柳「佐太郎を三度いただく居候」や小説「辰巳屋疑獄」にも取り上げられ、様々な形で食野、唐金一族は話題に上っていたのではと思われます。

後半では、寄進・奉納、修理されたものとして市内の主なものを挙げてみました。一番多く石灯籠があるのは春日神社で、元禄から享保の頃の石灯籠や、手水鉢等に享保とか佐野浦、食野、唐金等の名前が残っています。春日神社の前に妙浄寺がありますが、そこに元春日神社に置かれていた神宮寺時代の梵鐘が、唐金家の寄付で残っています（**表紙写真 参照**）。このほか、お寺関係のもの、地蔵など残っており、国宝がある慈眼院にも石塔があると聞いています。

また、寄進されたものとして、市内の佐野町場から少し離れたところに食野家の遺品類や関係の資料がいくつかあり、泉佐野市大木の禅徳寺には、食野家の菩提寺であった時雨林庵が明治の初めに廃寺になった折に託された寺宝があり、その一つが8代目当主食野元珉の肖像画であり、今も所蔵されています。

奈加美神社の弁財船

奈加美神社にはおそらく湊浦関係と思われる、食野一統ではなく新屋一統という名で10分の1スケールの奉納弁財船が奉納されており、構造的に木割雛形の木割の形から正徳期、18世紀前半位のものではないかとも言われています。昨年度から奈加美神社の奈加美文化館に、帆を復元して展示をしています。また、大木の葛城二十八宿の根本道場犬鳴山にある七宝瀧寺にも多くの石灯籠が奉納されています。

春日神社の玉垣

その他、佐野町場の面白い特徴として、佐野の屋号名字を挙げることができます。佐野町場は他地域に比べ、名字に職業や近隣の地名に何々「や」という谷とか屋が付くものが多いのは、当時から佐野町場の商工業が盛んであり賑やかであったことを示していると思います。こちらの写真は春日神社の玉垣ですが、「千鰯谷」という名前の玉垣がたくさん見られますので、一度ご覧いただければと思います。NHKの番組「日本人のおなまえ」でも取り上げられました。

市外にある主なものとしては、住吉大社に600基以上の石灯籠群があると言われていますが、南鳥居のところに唐金、佐野屋という名前の記された石灯籠があり、享保のものと寛政のものは確認しました。そしてもう1基、北脇参道の北側に正徳年代、1714年の永代常夜灯があるということです。これは、春日神社にある石灯籠とセットで奉納されたとのことです。確かに春日神社のものと似ています。

最後に、佐野町場は古い迷路のような町割りが多く残っているものの、伝統的建造物群保存地区のような建造物のまとまりがなく、町並みが新旧入り乱れています。私どもでも、北前船の日本遺産認定を契機に、町場に残る歴史的建造物を保存活用するために、建築確認の申請を除外できる歴史的建築物の市条例を制定しました。また、唐金家の元敷地に建つ元銭湯「朝日湯」の浴槽を改造して文化財保護課の事務所とし、登録文化財を推し進めることにしています。

旧新川家住宅

同じく佐野町場の中で、ふるさと町屋館、旧新川家住宅を既に整備しており様々な催しを開いています。例えば、旧新川家住宅では佐野町場を彷彿させる落語であったり、旭堂南舟先生に来ていただいて講談の会をしたり、紙芝居で語り部の会を催しています。ふるさと町屋館では新川塾を開き、佐野町場に関わる歴史を勉強する取り組みをしています。佐野町場の中をもっと知っていただくため、泉佐野市の観光ボランティアによる「てくてくツアー」や「街並散策」、今回ご案内しましたスタンプラリーなど、佐野町場を知るためのコンテンツを充実させ、佐野町場をできるだけ当時を彷彿させるものに変えていこうという取り組みを実施しています。

中野　食野家の食野一統について、さらに深掘りしたお話をいただきました。大阪府の日本遺産認定は当初、大阪市のみで、住吉大社が北前船ストーリーの非常に象徴的なところゆえに、住吉大社があれば良しということでしたが、やはり大阪市だけでは寂しいということで、泉佐野市に入っていただき大阪府下で二つ目の北前船ゆかりの町となりました。そんな中、日本遺産担当に中岡さんが就任され積極的に活動いただいています。観光庁のインバウンド誘致の施策で採択を受け、日根荘、葛城修験、北前船の三つの日本遺産を連携した新たなコン

テンツを造成し、インバウンド誘致にトライすべく現在、準備中です。

それでは次に、東北・新潟ブロックの秋田県にかほ市の齋藤様より、にかほ市の北前船の軌跡についてお話を頂戴します。

齋藤　にかほ市の齋藤です。にかほ市は秋田県の日本海側の一番南に位置し、南側には山形県があり、両県の境には鳥海山（2236m）が聳えます。2000mを超える山と海を併せ持つ地域は、日本全国探してもあまり例がなく、とても風光明媚なところです。泉佐野市の犬鳴山は修験の山で有名ですが、鳥海山も修験の山です。

にかほ市は、平成17年に仁賀保町、金浦町、象潟町の3町が合併して誕生しましたが、ご存じない方も多いと思います。実はさまざまな面ですごい市であるということを、今回、北前船との関係を通して皆さんに紹介していきます。にかほ市には平沢、三森、金浦、塩越という北前船が寄港した4つの湊がありました。

平沢湊は、泉佐野市の食野家と関係ある齋藤家があった場所です。今は「飛良泉」という酒造の蔵元になっていますが、ここに廻船や北前船関係の資料がたくさん残っています。それを上村先生や長谷川先生に調査していただき、その成果として泉佐野市との協定に至りましたので、大変感謝を申し上げるところです。この蔵元は日本で3番目に古く、創業は長享元（1487）年の室町時代と伝わっています。その3年後に足利義政が銀閣寺を建立したということですので、その長い歴史を理解いただけると思います。

その蔵元の向かいに親戚でもある齋藤憲三さんの生家があります。この齋藤憲三さんは、世界的な電子部品メーカー「TDK」の創設者です。世界30以上の国や地域にTDKの会社がありますが、その創設者はにかほ市の出身ということをぜひ知っていただきたいと思います。

齋藤 憲三

次に、金浦湊ですが、金浦の出身者に日本で初めて南極へ行った探検家、白瀬矗（しらせのぶ）がいます。現在の南極観測船「しらせ」の船名は、この白瀬から命名されています。白瀬矗は金浦湊に寄港する北前船を見ながら育ちました。大変わんぱくな子で、その北前船の下に潜って溺れ、死にかけたこともあります。それでも北前船を見ながら海の向こうに憧れ、探検家を目指しました。

白瀬 矗

寺子屋の先生、佐々木節斎から、探検家を目指すのであれば、五つの戒めを守らねばならないと教えをうけます。それが、酒は飲まない、煙草は吸わない、茶を飲まない、湯を飲まない、寒中でも火にあたらない、です。白瀬は極地探検のためにはそれが不可欠だと信じ、生涯守り通したそうです。

開南丸

その後、様々な経緯を経て白瀬は南極を目指すことになります。その際、南極へ航行した船は「開南丸」といいますが、たったの204tで鮭漁の船を少し改造しただけのものでした。同じ時期、ノルウェーのアムンゼンやイギリスのスコットなど南極を目指す人たちがいて、国を挙げての応援を受け、倍以上の規模の船で南極に向かっています。しかし、日本はあまり応援がなく、なんとか資金を工面し、わずか204tの漁船の船底に鉄板を取り付け18馬力の蒸気機関を搭載したものでした。18馬力というのは、バイクなら125cc位であり、それで南極を目指したわけですから、かなり無謀なことだといえるでしょう。

野村直吉

一方で、白瀬は南極探検をするにあたり隊員を募集し、石川県羽咋市の野村直吉という人が応募してきます。野村の父と兄は北前船の船頭で、直吉も若い頃に北前船に乗り航海技術を磨いていました。その後、勉強を重ね国際汽船の船長職になりましたが、その職にありながら、日本の海事思想、航海に関する様々な技術や歴史等を世界に広める絶好の機会だということで、無給でもかまわないと白瀬の南極探検隊に応募しました。そして野村が船長になり、204tの船で南極を目指したのです。

出発して1年2カ月後の明治45（1912）年に南極へ到達しました。上陸後、白瀬はそりで南極の極点を目指しますが途中で挫折し、そこを「大和雪原」と名付け、再び船で日本へ向かい無事に帰っています。既に南極に到達していたノルウェーのアムンゼンの乗組員は白瀬の船を見て、自分たちはこんな船では到底南極まで到達することはできなかっただろうと大変驚いています。それが多くの人に知られ、野村直吉の航海技術が高く評価されることになりました。考えてみると、野村船長の航海技術の原点は北前船です。荒波の日本海を往来した北前船の航海技術は非常に高かったといえるのではないでしょうか。日本遺産として、北前船を語る上でもっと北前船の航海技術にスポットが当てられてもいいのではないかと私は思います。

江戸時代の象潟絵図

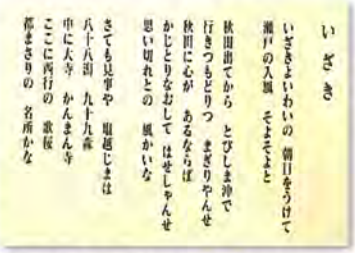
次に塩越湊があった象潟の紹介です。象潟という地名はご承知の方もいるかと思いますが、鳥海山を背に、多くの島を浮かべた潟湖で、平安時代から和歌に詠まれてきた名所でした。新古今和歌集にも象潟を詠んだ歌があります。その歌枕を目指したのが松尾芭蕉です。

皆さん「奥の細道」をご存じかと思いますが、奥の細道の目的地は松島と象潟と言われています。芭蕉は奥の細道に「松島は笑うが如く、象潟はうらむがごとし」と記しており、松島の明るいイメージに対し、象潟は寂しいイメージでとらえています。象潟で芭蕉は３句詠んでおり、その内の2句が推敲されて奥の細道に載っています。その中で有名な句が「象潟や雨に西施がねぶの花」です。

西施

西施というのは中国の四大美女の一人で、2500年位前、呉と越の国が争った戦国春秋時代の美女の名前です。芭蕉は雨の中、象潟に入り、松島とは違う愁いのある風情とさらに合歓の花が雨に打たれている様子を見て、悲劇の美女、西施を思い浮かべました。西施は越の国の生まれで、越王は、敵の呉王が美しい西施に夢中になっているうちに滅ぼしてしまおうと西施を送り込んだのです。実際にねらいどおりになり、呉の国は滅ぼされたわけですが、西施は美しいゆえに敵国に献上された悲劇の女性です。この西施をイメージして象潟を詠んだ発句と松島と比較した名文が「奥の細道」に載ったことで、象潟は愁いのある美しい場所として全国に知られるようになったのです。

江戸時代、さまざまなランキングを相撲の番付に当てはめることが流行りましたが、「大日本名所旧跡見立相撲」には、東の最高位、大関に富士山、関脇に松島、小結が象潟。西の大関は琵琶海、関脇に天橋立、小結に宮島とあります。現在、日本三景というと松島・天橋立・宮島となっていますが、象潟はその中にあって遜色がなかったということになります。そして、「大日本名山高峯見立相撲」には、富士山は別格で勧進元という主催者的な地位に置かれ、東の大関が鳥海山になっています。このように有名な名所と名山があるところがにかほ市の象潟だったのです。


いざき

いざきよいわいの　朝日をうけて
瀬戸の入風　そよそよと

秋田出てから　とびしま沖で
行きつもどりつ　まぎりやんせ

秋田に心が　あるならば
かじとりなおして　はせしゃんせ

思い切れとの　風がいな

さても見事や　塩越じまは
八十八潟　九十九森

中に大寺　かんまん寺
ここに西行の　歌桜

都まさりの　名所かな

この歌詞は「いざき」といい、福井県坂井市の北前船の日本遺産の構成文化財になっています。いざきは、毎年１月15日、１年の航海の安全を祈り船主の家に集まる行事で歌われる祝い歌です。今も1月15日、三国町新保の春日神社で祭礼に合わせて奉納されています。この歌詞にある「さても見事や塩越じまは」は象潟のことです。「八十八潟九十九森　中に大寺かんまん寺　ここに西行の歌桜　都まさりの名所かな」とあります。この歌は11分ほどかけて手拍子で歌うものですが、こういう歌詞が残っているくらい、象潟は名所だったのです。それが残念ながら、文化元（1804）年の地震で陸地になってしまい、島が田んぼの中に今も残り、現在は国指定文化財になっています。

現在の象潟

その象潟の近くに北前船が寄港する塩越湊がありました。その湊周辺1kmの範囲内に今も16カ所ほど神社が残っています。そこに船絵馬が納められており、象潟地区だけで秋田県最多の131点あるほか、秋田県で一番古い船絵馬も見つかっています。

その他にも「まげ絵馬」というものもあります。まげ絵馬とは、北前船の乗組員が航海途中でシケに遭った際に自分の髪の毛を切って神頼みする風習があり、運良く助かった折りにはその切った髪を絵馬に吊るして奉納したものです。

まげ絵馬

駆け足でお話しましたが、今後、TDK、白瀬、鳥海山、芭蕉、奥の細道という言葉、そして齋藤という名前を聞いた際には、秋田県にかほ市をぜひ思い起こしていただければ幸いです。

中野　にかほ市の北前船の歴史と、齋藤家と食野家との繋がりについてお話いただきました。にかほ市は北前船寄港地フォーラムの初期から参加されており、行政とともに民間の方々が活発に活動され、現在の日本遺産の活動を支えていただいています。白瀬中尉の南極行きが、まさか北前船に関係があったとは興味深いお話です。にかほの立地からして、北と西との関係は様々な物流を通じてあると思いますが、長谷川先生のオットセイについては非常に面白いお話で、蝦夷からさらに北との交易があった証左であると思います。非常に特徴のあるにかほ市のご紹介でした。

ここで、簡単に北前船日本遺産推進協議会と北前船交流拡大機構の活動に関して述べます。北前船の寄港地は130とか200とか言われていますが、現在、日本遺産として49市町が連携しています。104件ある日本遺産の中で自治体の数では四国の巡礼が50以上あるそうですが、北前船は16道府県にまたがる最大の広域連携であることが大きな特徴です。

49市町にもなるとまとまった活動が難しいため、2018年度よりブロック制で活動しており、北から５つのブロックに分けています。2022年度から本格的にブロック単位での活動を強化しており、文化、芸能、産業など地域的に活動しやすいテーマで、まち連合として分けています。運営は幹事市と、ブロックリーダー5市町で幹事市会を形成して活動計画を決定しています。ここで強調したいのは、ブロック制を敷き連携して活動を強化しているということです。文化庁では、日本遺産認定後6年目にその活動の評価をしており、我々も2022年度に6年目の評価を受けました。先ほど磯野参事官からお褒めの言葉を頂戴しましたが、このシリアル型の日本遺産の中でブロック制を敷き活動しているところに注目をいただいています。「関西北前船研究交流セミナー」は第1回の大阪市以来、今年で4回目ですから、関西ブロックでは早くからブロックで活動をしてきているということです。

青森県の巡回展と船山の絵馬

次に県単位での連携活動の例を紹介します。青森県には鰺ヶ沢、深浦、野辺地と３つの町が認定されており、巡回展示を行っている様子の写真です。それぞれの街の魅力をパネルにし、船山を写真のような絵馬にして３つの町・港を巡るスタンプラリーにしています。見かけは地味ではありますが、実は地元の子供たちに人気があり、子供たちを中心に地元の人たちも楽しんでおり、2021年からコロナ禍を挟み毎年実施されています。

こちらは子供のフェリー使節団で、加賀市と小樽市は浅からぬ関係がありました。加賀の橋立地区には幾件もの豪商廻船問屋があり、ニシンの肥料以外にも様々な商品を仕入れるべく小樽に進出し、小樽の港に石造りの倉庫を建てました。これが今も残り、運河沿いの魅力ある街並みを作っています。この歴史的な関係から古くより人的、物的な交流がありましたが、日本遺産認定を契機に、特に子供による使節団の交流が現在も行われています。まさに日本遺産が目指す目的の１つ、都市間交流が行われており、フェリーにより海で繋がる北前船のストーリーを子供たちに体験してもらう、両市の子供たちの交流です。子供たちにとっても、我が町の魅力と繋がる彼の町の魅力も肌で感じ再発見するという、非常に意義のある取り組みであり、人材育成にも貢献しています。

これは本年10月に実施された取り組みで、日本遺産同士の連携の例です。北前船と直接の関わりはありませんが、色で繋がりました。赤の日本遺産ということで、山形県の紅花と岡山県のジャパンレッド。青の日本遺産は、鯖街道と御食国の小浜市と藍の故郷、徳島です。黄色と緑の日本遺産は、高知県のゆずロードです。色で繋がった日本遺産の連携、これも一歩進んだ連携事例かと思います。

日本遺産の本来の目的は、地域の魅力をストーリーに仕立てインバウンド観光客を呼び込むことにあり、東京オリンピック開催を目指して日本遺産の認定が拡大されてきました。この目標達成はなかなか難しく、特に単独では非常に難しいと思いますが、このような日本遺産同士の連携という動きは、人を呼び込むコンテンツになるということで今後、非常に重要になると思います。

北前船日本遺産推進協議会および北前船交流拡大機構では、人材交流育成、シビックプライドの向上、都市間交流あるいは物産振興を目的に、様々な活動を行っています。前者では2022年度からブロック内、あるいは県内都市間で連携するにあたり、豪商、街並み、伝統芸能、そして特産品等をテーマに、共通のサブストーリーに仕立てた取り組みを進めています。現在、全体の活動としてオンラインセミナーを、夏休みには子供向けのオンラインセミナーを希望する自治体とともに実施しています。詳しくはまたの機会に譲りますが、この北前船日本遺産推進協議会の全体の活動、ブロックあるいは都市間交流の活動、そして北前船交流拡大機構の「北前船寄港地フォーラム」開催は今後も続けていきますので、ぜひ皆様のご支援をお願い致します。

続きまして、トークセッションに戻り、上村先生と長谷川先生にもう一度ご参加いただき、泉佐野市さん、にかほ市さんからの話を踏まえたご感想等をいただければと思います。

上村　にかほ市と泉佐野市の交流が始まったきっかけは、食野吉左衛門家の当主、食野伴吉さんが非常に探究心のある方で、40年以上前からにかほや本荘へ自ら赴き、そこで地元の人々と交流し様々な話を聞かれ、そのうえで齋藤家に食野家の文書がある、ということを私に伝えてくれたことに遡ります。それを受け1979年、にかほや本荘へ出向き調査しましたが、まだ他に何があるかよく分からなかったという印象があります。ちょうど9月頃で、田んぼが一面、稲穂で黄色に染まっている風景がまだ頭の中に焼きついています。鳥海山が見えるということは、食野家は廻船でにかほの目印として鳥海山を目当てに行ったのではないか。そして、ここの穀倉地帯の米を積んで帰ったのではないか、と妄想のようなことを抱いたのを覚えています。

にかほと佐野との繋がりや交流は、廻船あるいは食野家等を一つのきっかけとして、さらにこの輪を広げて交流を深めていっていただきたい、という感想です。

長谷川　先ほど蝦夷綿に関して北方世界と齋藤家の繋がりについて述べましたが、蝦夷錦についての補足と若干の私見を述べます。

青森県内で日本遺産に認定された鰺ヶ沢、深浦、野辺地の3カ所では、全て蝦夷綿が確認されています。蝦夷地に至る北前船の交易の中で、蝦夷綿の存在はもっと注目されてもいいのではないでしょうか。先ほどの共通のサブストーリーの話からも、蝦夷錦を一つのソースとして考えてもいいのではと感じました。

講演でも触れたように、にかほ市の齋藤家でも蝦夷綿が確認されており、南限はさらに拡大する可能性があります。青森県内の蝦夷綿の所在というのは北前船の船問屋の他に、浄土真宗の寺院の存在が挙げられます。今のところ他宗派では確認されていませんが、蝦夷綿と真宗寺院、船問屋と真宗の問題など、北前船が運んだものは様々な物品、いわゆるハードなものだけでなく、信仰や信仰に関わる事柄、人・物・情報などソフトの面でも、今後各拠点での確認と調査、連携、情報の交換が必要となるのではないでしょうか。それにより、北前船に関わる海のルートの持つ豊かな多様性が浮き彫りになるのではないかと、私は密かに期待しています。

中野　非常に貴重なご提案、ありがとうございます。最後に、泉佐野市の中岡様およびにかほ市の齋藤様から、今後の活動抱負について語っていただきたく思います。

中岡　北前船の日本遺産に認定いただいて以降、改めて佐野町場や食野・唐金家を考えるときに、これまでの保存状態や情報のPRがうまくできていなかった、というのが正直なところです。現在もどう見せていくかで、建物の整備だけでなくコンテンツや資料を改めて見直す必要があるのでは、と切実に思っています。

泉佐野市とにかほ市の両市は切っても切れない関係があり、この辺りはもっと深めていき、両市の皆さんにも知っていただくような取り組みをこれからも行おうと思います。泉佐野市に来ていただけば、こういうところがまだ大阪にもあると感じていただけるよう、また住吉大社の灯籠の話のように、大阪の中での位置付けをもう少し整理していきたいと思っています。

中野　今回はブロック間連携ができた非常に貴重なセミナーだったと思います。ご尽力、ありがとうございます。

齋藤　せっかくの交流ですので、北前船の頃を再現し、今もにかほ市から大阪に持っていくとしたらやはりお米ですし、逆に、大阪からにかほ市に持ってくるのはやはり布になろうかと思います。泉佐野市からはにかほ市の米を買っていただき学校給食に活用してもらい、にかほ市は泉佐野市から泉州タオルを購入するなどして、昔のような交流ができれば非常にいいのではと思っているところです。

中野　まさに北前船ビジネスを是非、進めていただきたく思います。今回のセミナーでは、北前船廻船を通じた豪商の繋がり、これが遠く離れた土地においても、過去から現在に至るまで深く繋がっていると実感する貴重な機会となりました。今後ますます、豪商ゆかりの両地で過去のように産業、文化の活性化を期待し、これで終了と致します。

■2024 年度開催地は　京都府宮津市です■

関西北前船研究交流セミナー実行委員会

宮津市　大阪市　大阪観光局　泉佐野市　神戸市　神戸観光局　洲本市　赤穂市　高砂市
新温泉町　姫路市　たつの市　小浜市　兵庫県　ひょうご観光本部　住吉大社　西日本旅客鉄道
大阪船主会　小倉屋山本　北前船交流拡大機構　関西・大阪 21 世紀協会

2024 年 3 月　発行